

一九九九年所員活動報告

麻田豊

【単行本】

・石井米雄・千野栄一(編)『世界のことは100語辞典(アジア編)』(三省堂、一九九九年六月三十日)の「ウルドゥー語」を担当し、「ことばの楽しみさまでま」のエッセーとして「愛」を書いた。「アジアの28のことはを対照させた目くるめくマルチ・リンガル小辞典。ふしぎな文字たちが乱舞する。」(本書帯より)

【教材】

・麻田 豊(編)『映画スクリプト《火》』(ウルドゥー語)『東京外国語大学語学教育研究協議会、一九九九年三月三十一日』を本学の視聴覚教材として編集した。

【エッセイ】

・「バキスターン」(『財』日本・バキスタン協会、一六二一・一六三・一六七号)に「スケッチ・ルボ／ラホール風物誌」を連載。ブックデザイナー・荒田秀也氏の絵にエッセイを付す。

【講義】

・上智大学コミュニティ・カレッジ一九九九年秋期講座「多様なイスラーム——地域と分野を超えたアプローチ」で「南アジアとイスラーム」(十一月十九日)を担当した。

【海外調査】

・一昨年に開始した文部省科学研究費補助金によるプロジェクト「海外所蔵南アジア近代諸語資料に関する基礎調査——南アジアとヨーロッパを中心として——」(基盤研究(A) 研究代表者・麻田豊)の最終年度。一九九九年七月二十三日から八月八日までバキスタンとインド各地でペルシャ語ウルドゥー語の写本の所蔵に関する調査をおこなった。訪問機関は、Karachi University(カラチ)、Oriental College(「ホール」)、Lahore Museum(「ホール」)、Quaid-e-Azam

Library(「ホール」)、B.I. Institute(アフマダーバード)、Dargah Pir Muhammad Shah Library(アフマダーバード)、Banaras Hindu University(ヴァーラーナシー)、Aligarh Muslim University(アリーガル)、Jamia Millia University(ニューデリー)。

阿保雅行

この1年間の研究活動報告

1・神奈川県スポーツ振興審議会、「学校運動部活動の活性化と今後のあり方について：建議」、神奈川県スポーツ振興審議会事務局・神奈川県教育庁生涯学習部スポーツ課、一九九九年三月二四日。筆者は、神奈川県スポーツ振興審議会専門委員会委員として共同で草案を執筆した。

2・「中学校・高等学校生徒のスポーツ活動に関する調査報告書：因子分析法による分析結果」、及び「中学校・高等学校生徒のスポーツ活動に関する調査：研究報告書資料」、神奈川県立体育センター指導研究部調査研究室、一九九九年三月。本稿は、平成10年度体育センター研究発表会の資料である。

3・「学校運動部活動の意義に関する実証的研究の試み：特に運動部員の欲求と効果の視点から」、体育センターレポート第26号、神奈川県体育センター、一九九九年九月。

4・「イギリスのスポーツ政策について」、日本体育学会・体育経営管理専門分科会、会報第35号、一九九九年10月。

5・共著、「本学学生のスポーツ・身体運動基礎科目に対する関心について——一九九九年4月のアンケート調査を中心に——」、東京外国語大学百周年記

念論文集、p.489-p.505・1996年

6・「21世紀に向けた生涯スポーツの展望：豊かなスポーツライフの実現のために」、かながわスポーツタイムズ第31号、神奈川県教育委員会、1999年12月15日。

7・共著、「女性競技者の育成について：サリ・ガネル選手のトレーニング例を中心にーブルース・ロンドンコーチの講演から」、スプリント研究第9巻、日本スプリント学会。1999年11月。本稿は1998年8月にセントメリー大学（イギリス）で日本スプリント学会のセミナー（英国陸連ナショナルコーチによる講義と実技指導）が開催されたときの報告書である。

8・「第13回アジア競技大会に参加して（報告）」、平成10年度全国審判委員長・部長会議報告書、財）日本陸上競技連盟審判委員会、1999年3月。筆者が国際競技審判員（ATO）として、任務についたときの報告である。

9・シンポジウム司会（共同）、「総合型地域スポーツクラブと地域生活」、日本体育・スポーツ経営学会第22回大会、帝京大学八王子キャンパス、1999年3月26日。

10・シンポジウム基調講演、「これからの運動部活動の展望と課題」、平成11年度第2回部活動指導者研修会、神奈川県立体育センター主催、神奈川県立教育センター、2000年1月20日。

ー以上ー

荒このみ

活動報告

論文

「否定されるブラック・マリナーハリエット・ジェイコブズの物語」
海老根・竹村編著『女というイデオロギー』、南雲堂、1999年2月、pp.87-104.

翻訳

エインズワース著『黒ねこのおきやくさま』、福音館、1999年10月。
なお個人の業績ではないが以下のシンポジウムについて記録として残しておきたい。

本学の独立100周年（建学126年）記念国際シンポジウムの実行委員長として、「言語」の21世紀を問う（Cultural Discourse and Its Prospect for the 21st Century）を1999年11月5日に開催する。1998年春より学長を中心に実行委員会を組織し、谷川道子さんと共に企画、文部省より平成11年度国際シンポジウム開催経費459万5千円を取得し、朝日新聞社の後援を得て以下のプログラムで行った。なお当日の来場者数は分科会1、約280人、分科会2、約410人、総合討論、約300人の聴衆を数えた。

東京外国語大学独立100周年（建学126年）記念国際シンポジウム
「言語」の21世紀を問う

Cultural Discourse and Its Prospect for the 21st Century

主催：東京外国語大学

後援：朝日新聞社

場所：東京外国語大学講堂

日時：1999年11月5日（金）10時～17時30分

分科会1 抗争する二つの力——地球化と地域化——10：15～12：15

司会者 宮崎恒二（東京外国語大学教授）

報告者 テッサ・モーリス・スズキ（オーストラリア国立大学教授）

バルバラ・ピッツィコニ（ロンドン大学SOAS講師）

西江雅之(早稲田大学教授)
川口裕司(東京外国語大学助教授)

分科会2 境界の言語と表象 13:30~15:30

司会者 谷川道子(東京外国語大学教授)
報告者 多和田葉子(作家)

小森陽一(東京大学大学院教授)
グリゴリー・チハルチシビリ

(ロシア)「外国文学」副編集長
荒このみ(東京外国語大学教授)

総合討論 文化の翻訳、翻訳の言語 15:45~17:30

司会者 西永良成(東京外国語大学教授)
討論者 マーガレット・ミツタニ(共立女子大学助教授)
アンジェロ・イシ

(ジャーナリスト・ポルトガル語講師・通訳)

柴田勝二(東京外国語大学助教授)
磯谷 孝(東京外国語大学教授)
富盛伸夫(東京外国語大学教授)
和田忠彦(東京外国語大学教授)

岩崎 務

論文

以前に翻訳をしたセネカの悲劇『オエディプス』について論文を書きました
が、刊行が遅れそうなので、詳細は次回の報告に回します。

翻訳

キケロー『善と悪の究極について』(共訳、『キケロー選集』第十巻・哲学

Ⅲ、岩波書店、二〇〇〇年三月)

哲学各派の最高善についての考え方を扱った全五巻の対話編 で、第
一・二巻はエピクローロス派倫理学、第三・四巻はストア派倫理学、第五巻は
ペリパトス派倫理学のそれぞれ紹介と批判になっており、第五巻を担当しま
した。

公開講座

「黄金の中庸に——ホラティウス・詩と詩論——」(東京音楽大学公開自主
ゼミナール「音楽のこゝろ」Ⅵ、一九九九年五月)

その他

「ホラティウス『カルミナ(歌章)』・詩人の尊厳」(週刊朝日百科「世界の
文学」第五三三号、朝日新聞社、二〇〇〇年七月予定)

宇戸清治

論文

・「ウイモン・サイニムヌアンのサンガ批判小説とプッタタートの影響」『東
京外大東南アジア学』第五巻一九九九年三月、一三頁~三八頁。
・「ウイモン・サイニムヌアンの長編小説における僧侶と民衆」『東京外国語
大学百周年記念論文集』一九九九年十月、二七九頁~三一六頁。

翻訳(雑誌)

・「クンチャーン・クンペン物語(四)」『プレームセーリー本』『東南アジア
文学』第九号(東南アジア文学会)一九九九年四月、四四頁~八一頁。
・「クンチャーン・クンペン物語(五)」『プレームセーリー本』『東南アジア
文学』第一〇号(東南アジア文学会)一九九九年七月、三頁~二二頁。

百科事典項目執筆

・「戦勝宝典」「歴史学事典第七巻―戦争と外交」弘文堂、一九九九年一月、三八八頁―三八九頁。

牛島信明

活動報告

たまたまこの時期に上梓されることになったもの―

共編著『スペイン学を学ぶ人のために』世界思想社

編共訳『ホセ・マルティ選集1、交響する文学』日本経済評論社

セルバンテス『新訳ドン・キホーテ』岩波書店

ウティン・ブンニャウオン

・著書

“Mother's Beloved - Stories from Laos -” (ラオス語著書「お母さん」(1999)の英語版), Silkworm Books, Bangkok (Bounheng Inversin, Daniel Duffy 他共訳)

・研究ノート

「ラオスの古典文学―新しい姿を求めて―」『シャンティ・ラオス古都紀行』pp.54-61, 曹洞宗ボランティア会、5月

・訳書

「クンルー・ナーンウア」(ラオス古典文学現代語訳改訂版)、国家出版局、ヴィエンチャン、3月

“Phacan theung Naa Nam - Hoom Leuang San Pathapay caak Niipun” (湖上の月

―日本からの名作短編集―), National Printing House, Vientiane、5月

岡村多希子

99年活動報告

1、NHK人間講座1999年7-9月期「1998ノーベル賞・21世紀への英知」のうちの「ジョゼ・サラマーゴ」(8-65頁)の監修・監訳。および論文「サラマーゴ―人と作品」(同誌、66-71頁)

2、「ポルトガル文学の現況・研究98」『文芸年鑑 平成11年版』(1999、日本文芸家協会)(119-122頁)

3、「ノーベル賞受賞者、文学賞」、『ポルトガル文学』『ブリタニカ国際年鑑 1999年版』

4、「ザビエル来日450年記念連続講座」第1回(24・2・1999、ポルトガル大使館で開催)における講演「ザビエルとフェルナン・メンデス・ピント」

5、「第10回全伯日本語・日本文学・日本文化学会」(10-11・6・1999、リオ・デ・ジャネイロ連邦大学で開催)における基調講演「Wenceslau de Moraesの見た日本」。

同講演をのちにまとめた論文「モラエスの日本」『ANNAIS DO X ENCONTRO NACIONAL DE PROFESSORES UNIVERSITARIOS DE LINGUA, LITERATURA E CULTURA JAPONESA-1999』, Universidade Federal do Rio de Janeiro, Faculdade de Letras, Departamento de Letras Orientais e Eslavas, Setor de Letras Japonesas (11-12頁)

岡田和行

著書

『アジア理解講座一九九七年度第一期「モンゴル文学を味わう」報告書』、国際交流基金アジアセンター、一九九九年四月一五日、一九二頁（上村明、海野未来雄と共著）。

研究ノート

「モンゴルの小説に描かれた日本人抑留者——R・ガンバトの小説「生きてゆかなければ」のヤマダについて——」『総合文化研究』、第二号、東京外国語大学総合文化研究所、一九九九年三月二五日、四〇—五一頁。

岡田知子

翻訳

「僕に何をさせようとも：僕はするよ」『東南アジア文学』第10号、二二—四十頁
エッセー

「カンボジア影絵劇—スバエク・トム 篝火が照らし出す物語」『アジア文学』第五号
アジア文化社、五七—五九頁

奥平龍二

一九九九年一月より同年一二末までに行った研究活動は次の通り。

1 学会・研究会・セミナーにおける口頭発表

‘Law and Politics in the Eighteenth Century Burma with special reference to the Role of Dhammathat or Law Books’（一八世紀ビルマの法と政治—ダマツ法律書の役割を中心として—）、「一九九二年二月一日、英国ハル（Hall）大学東南アジア・太平洋研究センター主催セミナー」。

「ロンドン大学（SOAS）における東南アジア研究の現状と同所蔵の東南アジア関係文献—キリスト教宣教師の記録を中心として—」一九九九年六月三〇日、東京外国語大学海外事情研究所。

「欧州におけるビルマ研究の現状と文献資料の所在—英国を中心として—」（一九九九年七月一〇日、緬甸勉強会。）

「二〇世紀におけるビルマ前近代史研究—コンバウン時代（一七五二—一八八五）を中心に—」、共同研究プロジェクト「東南アジアにとって二〇世紀とは何か—二〇世紀東南アジアの思想状況—」（一九九九年第二回研究会）、一九九九年九月一六日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

「ビルマの成文法マヌデエ・ダマタツにみるバドン王の政治哲学—1782年写本における「追加規定」挿入の意図」、一九九九年九月二五日、東南アジア史学会関東例会。（同一内容を補足修正し、一二月四日、愛知大学で開催された「東南アジア史学会」（第六二回大会）で発表。）

‘Features of the Theravada Buddhist State Structure with Special Reference to the *Mudra Beiktheik* or Supreme Coronation Ceremonies Observed by King Badori’（上座仏教国家構造の特徴—バドン王により挙行された「即位式」を中心として—）、ヤンゴン大学歴史研究センター主催国際学術大会（Myanmar Two Millennia Conference）一九九九年一二月一五日（於・International Business Centre, Yangon, Myanmar）。

2 論考

『The Role that the Dhammathat (Law Book) played in the "Theravada Buddhist State" with Special Reference to the Mannye Dhammathat of Eighteenth Century Myanmar (Burma)』、『東京外国語大学百周年記念論集』一九九九年(二月)、pp. 465-485。

3 講演

「最近のミャンマー情勢」、社団法人 国際情勢研究会(栗山尚一会長)、一九九九年六月一七日。

4 資料収集—一九九九年二月一四日〜同二六日(於:ミャンマー連邦ヤンゴン市)(一九九九年度所員活動報告)

亀山郁夫

【著書】

『あまりにロシア的な。』(青土社、一二月)

【編著書】

『世界の文学15—ヨーロッパ文学Ⅲ』(朝日新聞社、一〇月)

【共著書】

『ワールド・ミステリー・ツアー13』東欧編(同朋社、三月)

【訳書】

ウラジーミル・ソローキン『愛』(国書刊行会、一月)

【論文】

「恐怖という詩神——マンデリシュタムのスターリン頌詩」(『思想』二月号)

「20世紀ロシア文化の身体」(1999年冬季シンポジウム報告集:北海道大学スラブ研究センター刊行、三月)

「錯視のポリティクス」(『国文学』八月号)

【エッセー】

「冷徹な描写による書簡体小説」(『毎日新聞』夕刊、二月一〇日)

「八〇歳のソルジェニーツィンをめぐって」(『毎日新聞』夕刊、四月七日)

「運命の悲惨を描く異端の新作」(『毎日新聞』夕刊、六月一六日)

「現代ロシア文化をめぐる悲喜劇」(『毎日新聞』夕刊、八月一八日)

「プラトノフをめぐる」(『毎日新聞』夕刊、一〇月二七日)

【書評】

沼野充義編著『イリヤ・カバコフの芸術』(『週間読書人』一一月五日)

【教材】

NHKロシア語会話テキスト1・2月号〜12・1月号

【シンポジウム報告】

「転生に預いたホモンクルス——ユーリー・マムレーエフの世界」(北海道大学スラブ研究センター夏季シンポジウムでの報告、七月)

◆今年には『あまりにロシア的な。』の執筆に多くのエネルギーを傾けた。「越境」の問題を軸に、現代ロシア文化論としての体裁を整えるため、いろいろと工夫を凝らしてみたが、果たしてその意図が読者に届いたかどうか。幸い、東京新聞、共同通信系の地方各紙に書評が載り、青土社とりわけ編集者の宮崎志乃さん(本学ロシア語出身で、今度の本は彼女の初仕事だった)に大きな迷惑をかけることはなかったろうと胸をなで下ろしている。テレビ出演は、「テレビ・ロシア語会話」のほか、NTVのソルジェニーツィン特集(3月1日、2日)に解説者として出た。また、「日曜美術館」(9月)で現代インスタレーション芸術の巨匠イリヤ・カバコフのインタビューを行った。次に、2000年の予定を少し。まず2月に『ロシア語会話スタンダード40』がNHK出版から出る。ロシア語会話の入門書だが、文法を徹頭徹尾「軽視し」、「笑いながら覚える」のコンセプトを貫いた(漫画家の偉大さに改めて気づくとともに、われながら本当にヒマだと痛感してしまった)。そして3月には、現代思潮社からボリス・グロイスの『全体芸術様式スターリン』が教え子の古賀義頭君との共訳で出る。アヴァンギャルド芸術の無謬性を否定し、スターリン文化との見えざる紐帯を白日の下にさらした問題作で、ちょっとした反響を呼ぶのではないかと、ひそかに期待している。

川口健一

語学書執筆に追われ、小説の翻訳など、中途のままになっている仕事がいくつかあり、反省の多い一年でした。最近、法廷通訳などの依頼も一頃に比べ少なくなり、掛け持ちであくせく走り回ることもなく、本を読む時間が少し増えました。

＊【研究ノート】

「ニヤット・リンの小説における人物形象」、『東京外国語大学百周年記念論文集』（一九九九年一月一二日発行）、五〇七―五二八頁

＊【項目執筆】

ベトナム文学「ガイドライン」及び三二項目、『ベトナムの事典』（同朋社、一九九九年六月二〇日発行）

＊【エッセイ】

「ベトナム現代文学と獄中作家問題」、第一九回「獄中作家の日」集い冊子（日本ペンクラブ主催、一九九九年一〇月七日開催）、五頁

川辺 光

『東京外国語大学史』Ⅱ個別史、体育・保健」を執筆した。執筆にあたっては、次の2点に留意した。第1点は、私見をなるべく避け、事実を記述する。第2点は、その時代を通して、本学教育の歴史全体の中で、正課体育（体育・保健）はどんな位置付けにあったか、どんな役割を担ってきたかを記述する。

【実践活動】

東京外国語大学講座、平成11年度（硬式テニス 対象・社会人9月1日―7日 本学テニスコート）

神奈川マスタース陸上競技選手権大会（第16回大会 5月23日於大和スポーツセンター競技場）

M（男子） 60―64歳 走幅跳1位 三段跳1位

東京マスタース陸上競技選手権大会（第17回大会 9月19日於国立競技場）

M 60―64 走幅跳4位 三段跳3位

千葉マスタース陸上競技選手権大会（第18回大会 10月24日於県陸上競技場）

M 60―64 走幅跳1位 三段跳1位

関東マスタース陸上競技選手権大会（第8回大会 7月25日於武蔵野市立陸上競技場）

M 60―64 走幅跳3位 三段跳2位

沓掛良彦

今年度の乏しい仕事

貧乏暇無しとはよく言ったもので、今年もまた非常勤を含め週八コマの授業（講義六つはつらい）、三つの大学での集中講義、他大学でのものを含めて三つの博士論文の審査などに時間を取られ、ろくに勉強できなかった。顧みて忸怩たる思いである。老来ボウ然、記憶力も悪くなり、生来悪いアタマが酒で荒廃してさらに悪くなり、予習にも時間がかかる。今年一年のなんと

も貧しい仕事は左記のもののみ、やんぬる哉。今年出す筈だった編著の方も、しぶとい男二人がまだ原稿を出さないの、本にならない。やりかけの翻訳も、さる詩人の評伝も書きかけたままトン座している始末だ。

一、著書『詩林逍遙・枯骨閑人東西詩話』、大修館、二九三頁。これまであちこちに書き散らしたものを、一冊にまとめて本にしてみらった。論文めいたものも入れたが、読者(そんな奇人はきわめて少数だが)の迷惑を考えて、しやらくさいギリシア・ラテン語や注を取り除き、文学エッセイの形にした。老筆書客の戯文集にすぎない。

二、連載「壺中天酔歩・中国の飲酒詩を読む」、「しにか」十、十一、十二月号。これは二年間続く予定。毎月十五枚の短いものだが二年間もつかどうかが怪しいものだ。飲みながら書いているので、その前に酔死してしまう虞れが多分にある。

三、書評「小田実氏のロンギノス」、「すばる」三月号。

四、書評「ルチャーノ・カンフォラ 竹山博英訳『アレクサンドリア図書館の謎』」、「月刊百科」、日立デジタル平凡社

五、書評「外国語の詩を読むということ・川本皓嗣『アメリカの詩を読む』をめぐって」。季刊『文学』秋季号、岩波書店

六、セミナーでの講演「リズムは歌う・ギリシア叙情詩のながれ」於東京音楽大学公開セミナー、一九九九年五月。

七、公開講演「ギリシアの人間観と飲酒詩」、坂口謹一郎博士顕彰記念講演会。於ガーデン・パレス、上越市「酒と文化研究所」主催。一九九九年十月。

八、研究発表。「ホメロスの翻訳・土井晩翠を中心に」於日本ギリシア修好百年記念シンポジウム「ギリシアへの誘い・日本におけるギリシア研究と文学的受容」、慶応大学、一九九九年十二月。

・論文：ニューギニア『食人族』の過去と現在

春日直樹編『オセアニア・オリエンタリズム』の中の一編として、ようやく出版された。人に読んでもらう事を最優先に書いた論文のためか、一部芸が過ぎるとの批判もあったが、概ね好評。書評でも好意的に取り上げられており、久しぶりのヒット作となった。

・論文：親と子の絆

野村雅一・市川雅編『叢書・身体と文化第1巻：技術としての身体』の中の一編として、これもようやく出版された。以前に書いた論文「赤ちゃんはどこから来るの？」の続編であり、内容がオリジナルであるという点で自信作ではあるが、余り宣伝されていないので、全く評判が聞こえて来ないのが残念。

・翻訳：ペイトンソン『ナベン』

昨年(そして、一昨年)のままで、全く手をつけることが出来ず。来年も恐らく全く同じ事を書いているだろう。

三枝壽勝

ことしも雑文ばかり。

「韓国語からの翻訳」『日本語学』vol.18.3(1999.3.10) 明治書院、pp.14-24
「朝鮮文学など読まなくてよいわけ——ゾンビの世界での対話」『総合文化研究』1999.3.25 pp.25-35
「朝鮮語」『禁記と恍惚の道』チョン・チャン『黄金の階段』1999.5.10 自由フォーラム pp.263-281

【翻訳】蔡萬植著『濁流』講談社、1999.5.28 499ページ

最初のは朝鮮語から日本語への翻訳において問題となることをのべたもの。二番目のものはどうやら複数の人物がこのなかで自分のことが扱われていると誤解したらしい。虚構と現実の区別がつかない人々の笑うに笑えぬ世界をかいまみた。三番目朝鮮語のものは文学賞をもらったある未知の作家から突然自分の小説を出版するので解説を書いてほしいと連絡してきて頼まれて書いたもの。初めはなぜ自分に頼んできたのか分からなかったが読んで見てやつと分かった。関東大震災で父親がなぶり殺しにされた主人公が復讐の念から天皇暗殺をくだる。ところが実行前につかまり拷問をうけ死刑になるはずのところを拷問官により助けられ以後拷問技術者として再出発するというお話。朴烈、金子文子など実在の人物も登場しかなり道具立ては豊富なのに作品がそれを完全に生かしきれていないのでその材料のもったいなさについて書いた。発売されるとこの解説のことが新聞で話題になりたちまち在庫がなくなったというが、おそらくその後返品されてきたのじゃなかるうか。最近韓国で実在の拷問官が長年の逃亡生活のすえ捕まったてセンセイショナルな記事がでたが、そこであらためてこの小説が話題になったとかいいう。翻訳書については本号に解説があるのであろうから省略。

柴田勝二

○活動報告 — 一九九九年 —

昨年は百周年の記念シンポジウムに伴う種々の行事に携わり、本来の仕事になかなか時間が割けませんでした。自分には場違いな翻訳のシンポジウムの参加者になったり、名誉博士号授与のためにドナルド・キン氏の業績を調べ上げたりするのも、有益な業務ではありましたが、研究は相変わらず三島由紀夫を中心とする近代文学の論文を書いておりましたが、とりあえず三島に関する論文を本にまとめることが二〇〇〇年の目標です。また対象を谷崎潤一郎、川端康成といった近代の物語系の作家に広げ、幻想、寓意といった要素の表出との関連から、小説における物語性についてあらためて考えていきたいと思っています。

〈論文〉

- ・「海辺」から「家」へ——三島由紀夫の展開」〔「敍説」XVIII、七〇〜七八頁、一九九九年・一〕
- ・「日本」文学としての安部公房——眼差しの戦略」〔東京外国語大学「総合文化研究」第二号、一九九一年三四頁、一九九九年・三〕
- ・「暁の寺」と唯識論——「豊饒の海」への視角」〔「日本近代文学」第六〇集、九七〜一二〇頁、一九九九年・五〕

〈学会発表〉

- ・「憑依の脱落——『天人五衰』の位相」〔一九九九年度山口大学国語国文学会、於・山口大学、一九九九年・五・九〕

鈴木聡

この一年間の研究活動報告

1. 論文

- 「終末のこちら側——進歩と反復、歴史と想像力」〔「総合文化研究」第二号、一三二〜一二二ページ〕

- 「テクスト化される記憶——イエイツと第一次世界大戦」〔「東京外国語大学百周年記念論文集」、六三六〜六六六ページ〕

この論文集は、なかなか立派な体裁のものでありますが、欲をいえば、「巻頭言」のようなものをおいて、出版の趣旨なり、「記念」ということの意義なりを明確に示したほうがよかったのではないのでしょうか。

2. 研究発表

- 「記憶、歴史、忘却——イエイツの場合」と題して、イエイツ協会第三五回大会にて発表（十一月六日、会場は早稲田大学）。

「テクスト化される記憶」における問題提起を引き継ぎ、できれば総括となり得るものをめざしたのですが、どうやらより晦渋な方向に足を踏み入れているようです。この発表により、一年の締め括りとしてもくろんでい

たところ、年末に急遽、シンポジウム形式の研究会が催されることになり、惜越もしくは時期尚早との誇りを覚悟しつつ、発表者の末席を汚すこととなりました。

○「ナボコフと註釈——オネーギン註釈を中心に」と題する日本ナボコフ協会の研究会にて発表（十二月十八日、会場は東京都立大学）。司会は若島正氏、他の報告者は、加藤光也氏と長谷見一雄氏でした。

日本ナボコフ協会は、ナボコフ生誕百年を期して今年度発足したばかりです。英語・英米文学の専門家と、ロシア語・ロシア文学の専門家が一堂に会するという、じゅうらいなかった形態の学会である点、おおいに注目されてよい存在と申せましょう。自分の発表はじゅうぶんに満足のゆくものではなかったものの、さまざまな教示を得られた貴重な機会となりました。

鈴木玲子

活動報告

・著書

「エクスプレス・ラオス語」（ポーンケオ・チャンタマリー氏と共著）白水社、1999・3

・論文

「タイ語とラオ語の語彙比較研究」『アジア・アフリカ文化研究27』pp.115-130, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1999・3

・研究ノート

「ラオス語とタイ語の基礎語彙対応一覧表（2）」『東京外大東南アジア学』第5号 pp.66-82, 東京外国語大学、1999・3

「現代ラオス語の色彩用語について」『語学研究所論集』第4号 pp.81-98, 東京外国語大学、1999・3

「ラオス語の使役表現について」『言語研究IX』pp.63-68, 東京外国語大学、1

999・3

・翻訳

M.R.チャカロット「20世紀および今後のタイの文化の表現」『文化の生産』田村克己・編 pp.87-97 ドメス出版、1999・1

ウティン・ブンニャウォン「ラオスの古典文学——新しい姿を求めて——」『シヤンティ・ラオス古都紀行』pp.54-61, 曹洞宗ボランティア会、1999・5

志賀直哉「Seebee kap Maak nam thaw」（「清兵衛と瓢箪」）『Phacan theung Naa Nam』Hoon Leuang San Pathapay caak Niipun（湖上の月——日本からの名作短編集——）ウティン・ブンニャウォン監修 pp.11-18, National Printing House, Vientiane, 1999・8

・その他

「(9)Ko-Pala T. Kindsada & T. Shintani, eds. "Basic Vocabularies of the Languages spoken in Phongxay, Lao P.D.R." pp.169-190, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo Univ. of Foreign Studies, 1999.2

「ナーガの眠る街・ルアンババンのポートレース」『シヤンティ・ラオス古都紀行』pp.48-53, 曹洞宗ボランティア会、1999・5

（ラオス語の部分）『世界のことば1000語辞典』千野栄一、石井米雄・編、三省堂、1999・7

・口頭発表

「ラオスにおけるラオ語の現状」科研「民族間関係・異動・文化再編」第5回研究会、京都大学東南アジア研究センター、1999・3・30

「ラオス語の声調に関する一考察」平成11年度第3回「音韻に関する通言語的研究会」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1999・10・16

アレクサンドル・ドーリン

今年度の業績

- 「Tsveti yamabuki」(「山吹の花」)「明治・大正・初期昭和時代の名句集」編集、ロシア語訳。論文、解釈付き。サンクト・ペテルブルグ、「ヒペリオン」、1999、238頁。
- 正岡子規選集「俳句、短歌、エッセー」編集、ロシア語訳。論文、解釈付き。サンクト・ペテルブルグ、「ヒペリオン」、1999、212頁。
- 「Bagryaniye pion」(「明治・大正・初期昭和時代の名歌集」編集、ロシア語訳。論文、解釈付き)。サンクト・ペテルブルグ、「ヒペリオン」、1999、382頁。
- 「Japanese Alternative Emergence of a Symbolist Concept」(「東京外国語大学百周年記念論文集」)317-333頁。
- 西洋詩歌と無常感。—「総合文化」1999、2号、83-88頁。
- Bushido Ethics as Projected on European and Russian Chivalry Code (rereading medieval epic tales)。Paper presented at the 28th Conference of the International Society for Comparative Studies of Civilizations, St. Louis, USA, May, 1999.
- Russian Literature as a Cornerstone of Modern Japanese Culture. Paper presented at the 28th Conference of the International Society for Comparative Studies of Civilizations, St. Louis, USA, May 1999.
- トナルド・キーン学派のロシア日本学(発表)——福岡UNESCO協会記念学会。福岡、1999、10月。

田島信元

1 発表論文

- ①「あいさつの心理学：あいさつ行動の機能と発達」(単著 國文学、44、6、1999)
- ②「家族のコミュニケーション」(共著 日本語学、18、7、1999)

2 出版物

- ①「育児とことばの発達心理学」(共著 ラボ教育センター 2000)
- ②「社会的相互交渉と子どもの人格発達」(単著 多賀出版 2000)
- ③「発達研究の技法」(共編著 福村出版 印刷中)
- ④「心理学事典」(分担執筆 有斐閣 1999)

3 学会報告、出席学会

- ①「発達の文化的・歴史的アプローチ：歴史的文脈と歴史的形成」日本発達心理学会第十回大会、1999

4 研究調査

- ①科学研究費補助金に基づく「小学校入学時における対話様式を媒介とした行動統制の発達」研究で、荒川区立第三日暮里小学校1年2組をフィールドとして、クラス内における縦断的な対話様式の変容過程と子どものクラス適応行動の発達過程を観察した。
- ②民間等共同研究プロジェクトに基づく「機能的脳画像法による教育・学習の脳内機構の解明」研究で、日本アイソトープセンター(岩手県)および東北大学医学部(宮城県)において、学習活動中におけるPET、fMRIによる脳内活動の観察を行った。

谷川 道子

1999年も、研究活動というよりは実践現場との関わりのなかで慌ただしい1年でした。まずは、昨年からブレヒト生誕百年の流れでブレヒト関連の仕事がいくつか続きました。

◎2月、世田谷バブリックシアターでドラマ・リーディングの形で上演された宮崎真子演出、穂谷友子主演、プレヒト「アンティゴネ」の翻訳上演台本作成。

◎2月6・7日、世田谷パブリックシアターでのシンポジウム「ドイツ演劇の現在」に参加。ドイツ物の連続上演を機に、ベルリン・フォルクスビューネのドラマトウルグであるマティアス・リリエントールとスイスはテアター・バーゼルのドラマトウルグであるユー・ディット・ゲルステンベルクを迎えて、日本からは川村毅や太田省吾、西堂行人などと、90年代のドイツ演劇や日本にはそれに相当する職分がない「ドラマトウルグ」の役割、演劇の創られ方の彼我の違いなどを中心に、二日間わたって討議。

◎3月、世田谷パブリックシアターの松本修演出、柄本明主演、ブレヒト『ガリレオの生涯』の翻訳上演台本作成。その上演パンフ10・11頁に「ガリレオ／ブレヒト／アインシュタイン」こだましあう擬態の知性あるいは知性の責任」。

◎3月26日、「新たな演劇の時代の予感―戯曲への多様なアプローチ」、毎日新聞（日本におけるいわゆる「翻訳劇」の新たな位相での展開について）。

◎5・6月、新国立劇場上演、串田和美演出、松たか子主演『セツァンの善人』、その上演パンフ28・29頁に「ブレヒト・ワールドの虚実皮膜と戯れる面白さ」。

◎10・11月、新国立劇場から全国巡演、斎藤憐作、佐藤信演出、村井国夫・鳳蘭主演、『ブレヒト・オペラ』（これは、拙著『聖母と娼婦を超えて―ブレヒトと女たちの共生』をもとに劇作家の斎藤憐さんが書き下ろした日本オリジナルの作品です）。その上演パンフ14・17頁に「風の亡命者たち、風の恋人たち、風の創造者たち」。

また1998・99年はピナ・バウシュの「ヴッパタール舞踊団」芸術監督就任25周年でもあり、舞踊団はそれを記して世界的な巡演を行い、5・6月には日本でも4つの作品で5度目の客演。それにちなんで98年秋にドイツで刊行されたドイツの代表的な舞踊評論家ヨッヘン・シュミットの（ピナ・バウシュ論）『Pina Bausch – Tanz gegen die Angst』を、来日公演に何とか間に合わせて翻訳、等々。

◎2月、「もはや／まだ存在しないものの想起―ピナ・バウシュ・ヴッパタール舞踊団」の25周年記念公演に寄せて」、音楽の友社刊「バレエ」誌2月号22・23頁。

◎6月、ヨッヘン・シュミット著『ピナ・バウシュ―怖がらずに踊ってごらん』、フィルムアート社より6月1日翻訳・刊行。その巻末218・2231頁に解説として、「ピナ・バウシュのヘタランツ・テアター―訳者後書きにかえて」所収。

ついで4・6月には静岡県で第2回シアター・オリンピックスが、世界20カ国から42作品が参加して、2カ月にわたって開催。ハイナー・ミュラーはそのシアター・オリンピックスの生みの親の一人ということで、故人となつてなお名誉国際委員であり続けているだけでなく、開催期間中、写真展や作品の上演、シンポジウムなども開催され、その一連の関連企画に参加。

◎4・6月、写真展「ハイナー・ミュラー劇場」、静岡グラン・シップ9Fホールにて、ヴォルフガング・シュトルヒ企画・構成、ミュラーとクルーゲのテレビ対談も放映。その展示のテキストやパンフレットの翻訳・作成、対談ビデオの翻訳・日本語版録音。

◎5月6日、「神話を現代に蘇生―ハイナー・ミュラー写真展によせて」、静岡新聞。

◎6月5日、シンポジウム「ギリシア神話とハイナー・ミュラー」の司会と報告。パネリストはギリシアの演出家でシアター・オリンピックス国際委員長のアンドロス・テルゾボロス、ハイナー・ミュラー研究者でフランクフルト大学演劇学研究所所長のハンス・レーマン教授、ギリシアの演劇学研究者でハイナー・ミュラー翻訳者のエレニ・パロポウロ。第2回シアター・オリンピックスのシンポジウムを起こして記録する『シンポジウム・21世紀を読む』として、2000年3月末に静岡新聞社から刊行予定。

◎10月、「シアター・オリンピックスは千年紀をどうよぎるのか」学会誌「ドイツ文学」103号のマルジナリア欄183・185頁。

◎12月、『第2回シアター・オリンピックス公式記録』が刊行され、その183頁に「時と場をよぎる出会いの豊かさ」。

さらに、11月は我が東京外国語大学の独立百周年記念事業、夏休みにはAA研の中嶋幹起先生とその記念ボスターやプログラムなどを作りました。

◎11月5日、百周年記念国際シンポジウム「言語」の21世紀を問う」で、多和田葉子、小森陽一、グレゴリー・チハルチシビリ、荒このみのバネリスト諸氏を迎えての第二分科会「境界の言語と表象」の司会。荒このみさんと新曜社のご尽力でこの記録集もいま刊行準備中。

その他、いくつか順不同で列挙します。

◎10月、編集委員としてドイツ現代演劇特集の企画を担当した学会誌「ドイツ文学」103号が、特集依頼論文の11本、「日本におけるハイナー・ミュラー受容」の書誌やマルジナリア欄も含めてすべて揃って、何とか無事に刊行。

◎11月、小学館発行、日本劇作家協会編集による「せりふの時代」13号の特集「翻訳劇の現在」の90～93頁に「翻訳劇」／「翻訳」／「劇」？ードイツ演劇の視角から考えたこと。

◎12月8日、世田谷パブリックシアターで「日本の劇作家」というシリーズ・レクチャーを企画、その冒頭に佐伯隆幸、鴻英良、内野儀たちと西堂行人氏の司会で行なったシンポジウム。以降、毎月1人づつ、それぞれ日本の劇作家を取り上げて、レクチャー。私の担当は2000年1月13日、久保栄とドイツ演劇と「火山灰地」。

◎12月26日、シアター・カフェ・シンポジウム「ハイナー・ミュラー没後4周年」。HMPの西堂行人、内野儀とともに、それぞれ「ハムレットマシーン」を演出した岡本章、佐藤信、川村毅の3氏を迎えて、上演ビデオも見せながらのシンポジウム。

中山和芳

一九九九年 活動報告

・論文

「ミカドの外交儀礼」(『Quadrante』 第一号、

七―五二頁、東京外国語大学海外事業研究所)

・書評

W・デ・モラエス(岡村多希子訳)『徳島の盆踊り』

(『総合文化研究』 第二号、一三五頁)

西永良成

・編著書『翻訳百年―外国文学と日本の近代』(原卓也氏と共編、大修館書店、2000年2月刊)

・訳書エクトール・ピアンショッティ『夜が昼に語ること』(国際言語文化振興財団刊、2000年2月刊)

・論文「逸脱と解放―フランス亡命作家たちの文学」(『大航海』No.32、2000年2月号)

・エッセー「夜の作家―H・ピアンショッティのこと」(『新潮』1999年9月号)

「バリー憧憬と回想の都」(『CO』1999年11月号)

・シンポジウム「言語の21世紀を問う」総合討論「文化の翻訳、翻訳の言語」司会(1999年10月)

蓮見治雄

1999年度の研究活動報告

1・第5回国際シャーマニズム研究大会に出席。口頭発表。(題目:シャーマニズムの持つ重要性について)。於ウランバートル、モンゴル国。1999・8・11～1999・8・5

2・モンゴル国無形文化財委員会の会議に外国人顧問として出席。同委員会のあり方、意義、今後の運営方針等について協議。また、過去30～40年

間の無形文化財、特に英雄叙事詩、民謡、舞踏、ホーミー等の記録テープをユネスコの援助で修復し、保存することとなり、この協議も現在進行中。尚、これらの記録テープは約450「目」の長さ及ぶ。

3・論文。『元朝秘史中の「伴より他の影も無く、尾より他の踪影なし」という語句について』(中国内蒙古師範大学巴雅児「バヤル」教授記念論集招待論文。モンゴル文)1999年10月出版予定。

4・『モンゴル語のオノマトペ』小事典」リンセーマー著全200ページの校註、序論。1999年12月出版予定。

5・(著書)東モンゴルの英雄叙事詩『シリン・ガルゾー・バートル』校註。250ページ(モンゴル文)。2000年10月中国内蒙古文化出版社より出版予定。

6・(著書)モンゴル乗用馬の諸特徴。350ページ。2000年に集英社より出版予定。

7・(共著)頭で話すモンゴル語(会話書)
モンゴル語に初めて接する人がモンゴル人とどこまでコミュニケーション可能かを考えて作ったもの。(1999年末までに原形がほぼ完成)

8・(共著)熟女のモンゴル民話
学外活動として一般の人々にモンゴル語を教授。その結果、受講者たちがモンゴル民話を訳出、出版することとなった。現在進行中。

9・【創作活動】モンゴル歌謡のための作詞。ー 約20編。そのうち4編がすでに曲がつけられ歌われている。ここ30年間モンゴル歌謡の中の長歌といわれるジャンルでは新しい作品が皆無であった。私の詩のうち3編は新しい長歌となって歌われている。

藤井守男

一昨年(1998)10月、国際交流基金のフェローとして来日されたシャフイーイー・キヤドキャニ、テヘラン大学教授が一年の滞在を終え無事帰国された(1999/10)。「ペルシア文学」研究の分野で、現時点で、最高の研究者として世界的に知られる氏に日本国内で身近かに接する機会を得たことは、日本のイラン研究の水準の向上に大きな力となろう。氏の来日の記念として、1998年にイラン国内で創刊されたペルシア語の文化・思想・芸術評論誌『ボハラー』の第2号(No.2. October-November 1998, pp.16-26)に掲載されたエッセイを氏の許可を得た上で全訳し、簡単な注釈をつけた。「音の類似性(類音作用)の魔力」と題するこの論文では、ペルシア語の音韻体系の特殊性が生み出す様々な側面が紹介されているが、注目されるのは、ペルシア語に詩的言語としての可能性を保證する音韻的特性とともに、この音韻構造の持つ特性に、イランの社会的価値、思想傾向、果ては、政治的事象までもが引きずられ続ける文化的「依存症」の事例が、「類音作用の魔力」という視点から論及されている点であり、この文章を通じて、文学研究者、詩人として知られる氏の鋭敏な文化史的問題関心の一端を知ることができる。

松浦寿夫

文章に関しては、本年もまたまとまりのある仕事ができず停滞の微のもとにあり、反省は深まるばかり。以下の短いテキストを発表するにとどまってしまう。

・「純粋性の魔—ファシズムとモダニズム」(『學鐙』、一九九九年二月号)
・「感覚のバニク状態—誰がセザンヌを必要としているのか」(『美術手帖』、一九九九年十月号)

- ・阿部良雄、『群衆の中の芸術家』筑摩学芸文庫版解説（一九九九年十月）
- ・「絵画論の一步手前で」〔図書新聞〕、一九九九年九月十八日
- ・「規範なき規範主義―藤枝晃雄を読む」〔SA Pジャーナル〕第二号

絵画制作の発表としては、

- ・岡崎乾二郎／松浦寿夫展「ゆーじん画廊、東京、九月」
- ・個展（なびす画廊、東京、十二月）

真鍋 求

現在神経生理学および運動生理学の2つの領域から、ヒトの身体運動の解析を行っている。一つは中枢神経による身体運動制御メカニズムの解析であり、他方では運動時の呼吸ガス分析を行うことによって、トレーニング方法や効果の検証を進めている。具体的には以下の2項目について実験を進めてきた。

1、身体運動制御

1 投球動作における前腕部の運動と、反射性の筋力発揮について

野球の投球動作に焦点をあて運動学的側面と神経生理学的側面から観察を行った。具体的には筋電図を記録し、投球動作における前腕部の運動様式と伸張反射（Stretch Reflex）と思われる筋力発揮について分析した。

まず運動学的には、投球動作のフィニッシュ時の肘関節及び手関節の動きに注目した。瞬間的・相動的に腕を振る場合、例えばバドミントンでスマッシュをしたときやバレーボールでスパイクを打ったときなど、フィニッシュ時に肘関節の回外運動が観察される。一般的にこの運動は合理的な筋力発揮に適合した運動であると言われている。これに対して野球では体に巻き付けるように腕を振り下ろす運動、つまり手関節の屈曲運動が重要とされてきた。しかし様々な写真を観察すると、投球動作においても肘関節に回外運動が起こっているこ

とが明らかである。この点に注目し同一被験者において、肘関節を回外した場合と手関節を屈曲した場合を比較しながら検討を進めてきた。最終的にはこれらの運動の違いとパフォーマンス（球速）との関係がつかめれば運動学的に興味深い。

一方神経生理学的には、投球動作への脊髄の伸張反射の関与に焦点を当てている。瞬間的な筋力発揮をする時には、脊髄反射である伸張反射を利用していると言われている。例えば連続ジャンプを行うと、足関節伸筋である下腿三頭筋にバースト状の筋放電が見られる。同様の放電が投球動作時の上腕二頭筋の筋電図にも観察された。これはジャンプ時と同様脊髄反射性の放電である可能性が高い。ただしこれらの相動的な運動を観察する場合電極やコードが瞬間的に揺れて、その影響が筋電図記録に混入してしまう。今後これらをキャンセルしながら観察を続けなければならない。

2、呼吸ガス代謝

1 100%及び50%VTレベル負荷における運動ピッチの影響
千葉大学との共同研究で、Ventilatory Threshold（以降VTと略す）下レベルの負荷において運動のピッチ変化が、ガス代謝にどのような影響を及ぼすかを検討した。具体的には被験者に100%VTおよび50%VTの2種類の負荷レベルを設定して自転車駆動運動を行わせた。それぞれ毎分50回転、70回転、90回転および110回転とペダリングピッチを変化させ、漸増負荷と定常負荷の二つの異なるプロトコルから比較検討を行った。

その結果100%VTレベルの運動では毎分50回転のWork Efficiencyが有意に高い値を示した。また毎分70回転と110回転を比較すると70回転の運動を行った方が有意に高い値を示した。同様の結果が50%VTにおいてもみられた。さらに100%VTと50%VTを比較すると、全てのペダリングピッチにおいて100%VT負荷レベルで運動を行った場合のWork Efficiencyが、50%に比べ有意に高い値を示した。これらの傾向は、Gross Efficiencyの値とNet Efficiencyの値を比較した場合とくに顕著であった。これらの結果より同一の運動に置いて、VTレベルの違いに関わらず運動のピッチにより、呼吸ガス代謝に差異のあることが認められた。

尚これらの成果は1999年度の日本体育学会において発表し、Exercise

水林 章

一年を顧みて

昨年刊行された仕事

「逆光のなかのドン・ジュアン」ポストモダンへの序章」

これは静岡県立舞台芸術センターで催された第二回シアター・オリンピックを記念して刊行された「シアター・オリンピックス手帖」に発表された論文である。拙著『ドン・ジュアンの埋葬—モリエール「ドン・ジュアン」における歴史と社会』(山川出版社)を下敷きにしたエッセイ風の文章だが、テキストを特徴づけている歴史的刻印とその歴史的刻印が読みうるものとなった今日の歴史的事態を架橋する作業がより意識的に追求されている。それは、言うまでもなく、十七世紀フランスに現れた演劇作品の上演に今日を生きる観客が立ち会うという具体的体験を念頭においての配慮であった。六〇〇枚の著作とは違った愛着のある小編となった。

« Crise du texte, texte de la crise - figures de la famille et ordre social dans le livre I des Confessions »

本学総合文化研究所の「総合文化研究」第二号に発表した、ルソーの『告白』第一巻のテキスト分析である。『告白』第一巻を対象とした文献にはいくつかの古典的研究が存在するが、本稿におけるわたしの狙いは、いつものことながら、テキストの徹底的な分析をとおして、テキストと歴史を結ぶ複雑な回路に光をあてることであった。テキストの構成それ自体のなかに歴史の磁力を読みとる作業と言い換えてもよい。いずれは日本語版も用意したいと考えている。

週刊朝日百科『世界の文学』「ヨーロッパⅡ・6 ヴォルテール、ルソー—啓蒙の世紀」水林章・責任編集」

・「知の光が広がり議論する公衆が出現した」

・「啓蒙の形式」

・「市民社会への批判的眼差し」

・「公共圏を支える制度」

・「劇場、公衆の集う空間」

・「父」の変容

・「文学小辞典」：項目「アカデミー・フランセーズ」、「イマヌエル・カント」、「カラス事件」、「卑劣なもの」、「文明化」

週刊朝日百科『世界の文学』「ヨーロッパⅡ・5 ヘサド、デイドロ、ラ

クロエロスと理性」驚見洋一・責任編集」

・「新エロイズ」幸福の地平に向かつて」

昨年執筆した論文

« Figaro dans le procès de civilisation » à paraître dans les Mélanges offerts à Georges Benrekassa

一九七九年から一九八三年の二度目の留学時代に、パリ第七大学で指導していただいたジョルジュ・ベンレカッサ教授の退官記念論文集のために執筆した論文である。恩師の業績をたたえる目的で刊行される論文集への寄稿は、わたしにとって大きな喜びである。本論文の狙いは、ボーマルシェの『フィガロの結婚』をノルベルト・エリヤスの言う「文明化の過程」の観点から読み解くことであった。執筆の時期が数年早く、使用言語が日本語ということもあって、内容はおのずと異なるけれども、同じ主題を扱った論文をわたしはすでに拙著『幸福への意志—「文明化」のエクリチュール』(みすず書房)に発表している。

現在進行中の仕事

昨年の活動報告にも取り上げた、「十八世紀学会」における報告をもとにした「文芸の国家から公衆へ」は今も書き続けている。現在取り組んでいるのは本論の最後の部分にあたるルソーにかなする章で、ルソー的世界における「公衆」と「公論」の位置を確定しようとしている。ぜひとも今年中には決着をつけたいと思う。

最後に、昨夏もまた南フランスの小都市フィジャックで国際室内楽音

楽祭の組織にかかわったことをつけ加えておこう。弦楽四重奏のマスタークラスを中心にすえたさやかな音楽祭だが、驚くなれ、世界最高のカルテットのひとつ、バルトーク・カルテットのチェリスト、ラズロ・メズー氏が参加を承諾してくれたのである。わたしはハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの作品と格闘する日本の若い音楽家たちにメズー氏がおこなったレッスンの通訳を引き受けたのだが（氏は流暢なフランス語を操られる）、このレッスンはまことに印象深いものであった。十八世紀のヨーロッパに関心を持つわたしは、バプロ・カザルスの高弟が披瀝する音楽作品を対象とする深い、実に深い洞察のなかに、自分の専門的研究にとってきわめて有益な数多くの指摘を見いだしたのであった。

和田忠彦

正確にすべてを把握しきれないが、結果をながめてみると、赴任直後の慌しさを予想して仕事を減らしてよかったとあらためて思う。

■論考・エッセイ・書評等

▽「想像するリアリティ」、AERA Mook『童話学がわかる。』（朝日新聞社）、26～29頁、1999年3月

▽書評：アントニオ・タブッキ「黒い天使」——「宙ぶらりんの誘惑」『FIGARO Japon』1999年4月号

▽「夢みはしない——清水哲男「唄・一九六一」」、『現代詩手帖』（思潮社）、42～43頁、1999年4月号

▽「詩」、現実を拒絶するもの「バズリーニ映画祭——その詩と映像」（ユーロスペース）、80～82頁、1999年4月

▽「文学そして状況」（編訳）、同上、12～16頁

▽「作家は作家を育てられるか」『新潮』1999年6月号、236～237頁

▽「越境の文学者タブッキ」『読売新聞』1999年5月18日夕刊

▽「バズリーニ全集刊行をめぐって」、『東京新聞』1999年6月14日

▽書評：エーコ『前日島』——「入れ子細工ふう新漂流譚」、『東京新聞』1999年7月11日

▽「バズリーニにとって生きることが詩だった。」『GQ Japan』（嶋中書店）、1999年7月号、135頁

▽「めぐりあうときの愉しみをもとめて」『季刊 本とコンピュータ』9号、1999年夏号

▽書評：熊野純彦『レヴィナス入門』——「距離の記憶」、『文学界』1999年10月号、314～315頁

▽「コミュニケーションの手ざわり」『季刊 本とコンピュータ』10号、1999年秋号

▽「声」のまわりで『ことし読む本いち押しガイド2000』（メタログ）130～131頁、1999年12月

▽「どこにもない場所の地理学」『文学界』2000年1月号、185～189頁

▽「うその地理学——カルヴィーノの水脈をたどって」『大航海』13号、84～90頁、2000年1月

■訳書

▽エドモンド・デ・アミチス『クオーレ』（新潮文庫）1999年3月

▽イタロ・カルヴィーノ『サン・ジヨヴァンニの道』（朝日新聞社）1999年11月

■シンポジウム等

▽「Trasmissione della memoria ovvero il cerchio invisibile della Tabucchi」、『Antonio Tabucchi: Geografia di un Escritor Inquieto』、1999年4月13日～17日、リスボン

▽「バズリーニ映画祭記念シンポジウム」『大島渚、四方田犬彦、浅田彰』1999年4月22日、有楽町マリオン（朝日新聞社）

▽「言語と海賊」『文学・映像・演劇をめぐって——バズリーニ・詩と映像』『四方田犬彦、田中倉稔、田中千世子』1999年4月26日、早稲田大学文学部

▽「映像と言語のはさまで——ストローヴィユイレと現代イタリア文学」『ストローヴィユイユイレの軌跡』202～206、1999年12月7日、アテネフランセ文化センター

「一九九九年 総合文化研究所活動報告」

東京外国語大学独立百周年記念特別講演会

『言語と表象』

主催 総合文化研究所

共催 国際言語文化振興財団

後援 朝日新聞社

「テクノロジーと建築」十月七日 飯島洋一

「筆触のマテリアリスム」十月十三日 松浦寿夫

「現代詩―その自由とエロス」十月二二日 松浦寿輝

「現代芸術と庭の思想」十月二七日 小林康夫

「トランス・カルチュラル・アドヴェンチャー」

十月二八日 池田理代子

出版

公開講座「外国文学を翻訳する」(97・98年度)を

もとに『翻訳百年―外国文学と日本の近代』(原卓也・

西永良成編、大修館書店)を刊行。

各種研究会

朝鮮文学研究会 毎月第二土曜日

スペイン語文学研究会 毎月第三土曜日